

二〇二四年一〇月一日

等伯の襖絵の菊匂ふごと
古城址の磴へこぼる萩の屑
ビル建設高き足場に秋の人
爽やかや少女にノーベル平和賞

よし子

はく子

治男

満天

二〇二四年一〇月九日

古城址の土塁に熟る柿高し
月はいま赤銅と化し蝕極む
月蝕や仄かに匂ふ石榴の実
雨だれの穿つ大地に草萌ゆる

はく子

はく子

あさこ

みちほ

二〇二四年一〇月八日

月食をうち仰ぎ見る虫の闇

三刀

二〇二四年一〇月七日

里山の昏れなんとして望の月
陋巷の屋根を照らしぬ十三夜
おほかたは刈田となりぬ月の谷戸
吾子をかし紫苑に寄りて背くらべ

雅流

よし子

雅流

有香

二〇二四年一〇月六日

闘病の碁敵見舞ふ秋の暮
金木犀一夜の風に無一物
紅葉の木々を愛でゆく山路かな
銀木犀裳裾に匂ふ大師像
園児らと遊ぶシスター笑みさやか

はく子

ともえ

みちほ

なつき

菜々

二〇二四年一〇月五日

障子貼る長押の遺影に声かけて
咲きほこる金木犀に雨無慈悲
自転車の籠いっぱいに秋の草

菜々

満天

さつき

二〇二四年一〇月四日

甘藷掘る父より継ぎし庭畑に
秋蝶を道連れに行く遍路笠
杖頼る紅葉の寺の磴高し

菜々

なつき

つくし

毎日句会みのある選・二〇二四年一〇月一四日